

## 解答

一	配分	2	定石	3	会心
---	----	---	----	---	----

二	問一	A	イ	B	ウ
問二		ア・ウ			

(2) (1) (普遍的なものであれば) 文化の優劣とは無関係に取り入れられるので、自分たちの民族の誇りを損なうことなく学ぶことができるから。

問三	ア	認識とは、技術と結びつけられた西洋近代科学のように普遍性をもつものではなく、個別の視点から成立した一形態をとらえるものの見方のことである。
問四	イ	
問五	イ	
問六	オ	
問七		

三

問一	ウ	
問二	ア	
問三	数学者(的)	
問四	エ	
問五	ア	
問六	イ	
問七	エ	
問八	エ	
問九	オ	
問十	エ	

## 解説

二

問二	(2) 続く部分で「民族の誇りを損なうことなく受け入れ、学ぶことができる対象」として、「(西欧自然科学を) 普遍的なものだと思ひ込むことができれば、それは精魂を傾けて学ぶべき対象になります」とあります。こうして、「異なる認識に優劣をつけること」なく、普遍性を持つ技術として西欧自然科学を取り入れていくことができたということが述べられています。
問七	続く部分で「西欧自然科学に普遍性を見ている私たちは、その認識に普遍性を見ているではありません」とあり、「認識の一形態としての西欧自然科学」を見ているのであって、「認識は普遍性の対極」であると述べられています。

三

問三	本文の最後のほうに「ぼくは数学者の息子らしく考えた」とあり、「ぼく」は母さんのことを母である以上に「数学者」だととらえています。
----	--